

**P3-9-6 ポリープ状異型腺筋腫に対して妊孕性温存目的に高容量黄体ホルモン療法を施行した17例の長期治療成績**がん研有明病院<sup>1</sup>, 長崎大<sup>2</sup>野村秀高<sup>1</sup>, 杉山裕子<sup>1</sup>, 谷川輝美<sup>2</sup>, 高橋顕雅<sup>1</sup>, 宇佐美知香<sup>1</sup>, 的田真紀<sup>1</sup>, 岡本三四郎<sup>1</sup>, 金尾祐之<sup>1</sup>, 近藤英司<sup>1</sup>, 加藤一喜<sup>1</sup>, 馬屋原健司<sup>1</sup>, 竹島信宏<sup>1</sup>

【目的】ポリープ状異型腺筋腫 (APA) に対する高用量黄体ホルモン (MPA) 療法の有効性を明らかにすることを目的とした。  
 【方法】2001 年から 2011 年までの期間に当院で妊孕性温存目的に MPA 療法を行った症例は 18 例。子宮内膜全面掻爬にて APA と診断した症例に対し、200mg/日から 600mg/日の MPA を投与し、3 か月毎に全面掻爬もしくは TCR を行った。最低 6 か月の投与を行い、この時点で異型腺管の減少を認めた症例に対してはさらに 3 か月までの追加投与を行った。9 か月までに異型腺管が消失しなかった場合には 3 から 6 か月毎の経過観察とした。院内倫理委員会承認の下、これらの症例に対して後方視的検討を行った。【成績】18 例の平均年齢は 33.6 歳 (29-45 歳)。35 歳未満が 9 例、35 歳以上が 9 例であった。平均観察期間は 77 か月 (中央値 73.5 か月) であった。18 例中、初回全面掻爬で高分化型類内膜腺癌の合併を 4 例 (22.2%) に認めた。18 例中 10 例に対して、観察期間中に最終的に子宮全摘を行った。10 例中 9 例で高分化型類内膜腺癌を認めた。治療開始から子宮全摘までの期間の中央値は 40.3 か月 (24 か月から 68 か月) であった。子宮全摘後の再発は 1 例も認めていない。観察期間中に妊娠は 4 例に認められ、3 例が分娩に至った。この 3 例はいずれも 35 歳未満であり、35 歳未満での結婚症例は 4 例であったので、75% で健児が得られた。【結論】APA に対する MPA 療法により、原病死に至る症例は認めなかった。35 歳未満の症例に対しては、産科予後が特に良好であり、考慮すべき治療法の一つになりうると考えられた。

**P3-9-7 複雑型子宮内膜異型増殖症の高用量黄体ホルモン療法における組織像の電子顕微鏡的アプローチの試み**日本医大<sup>1</sup>, 日本医大千葉北総病院病理<sup>2</sup>山田 隆<sup>1</sup>, 島津絢美<sup>2</sup>, 松橋智彦<sup>1</sup>, 山本晃人<sup>1</sup>, 川瀬里衣子<sup>1</sup>, 黒瀬圭輔<sup>1</sup>, 土居大祐<sup>1</sup>, 米山剛一<sup>1</sup>, 鴨井青龍<sup>1</sup>, 平野孝幸<sup>2</sup>, 小黑辰夫<sup>2</sup>, 竹下俊行<sup>1</sup>

【目的】近年、若年者の複雑型子宮内膜異型増殖症や高分化型類内膜腺癌に対し、高用量黄体ホルモン療法 (以下 MPA 療法) が試みられている。その治療過程を形態的に観察した報告の大部分は光顕レベルでの観察が主体で、微細構造上の影響を詳細に観察した報告は少ない。今回、電子顕微鏡的アプローチにより、その形態的变化について検討したので報告する。【方法】MPA 療法を行った複雑型子宮内膜異型増殖症に対し、定期的に内膜生検を施行。そのうち同意を得た 1 例の組織検体を用いて、エポキシ樹脂に包埋した超薄切片を作製、その治療過程の形態学的変化を透過電子顕微鏡で観察した。【成績】MPA 投与後、早期から腺細胞は膨化し、胞体内には変性したミトコンドリアやクロマチンが細顆粒状で緊満感のある核を認めた。細胞同士が新たな腺腔を形成しようとする像も見られ、その中に卵管上皮化生や細胞質内小腺腔 (ICLs) を有する細胞も見られた。治療経過とともに、クロマチンが粗顆粒状でヘテロクロマチンを呈する扁平上皮への分化を思わせる像や、敷石状に配列した細胞が橋を形成する扁平上皮化生や卵管上皮化生など上皮の化生性変化も認められた。間質の占める割合も治療効果とともに徐々に増加し、異型のない極性の整った腺腔周囲の間質には、核の辺縁にクロマチンが凝集した細胞が敷石状配列を示す像も認められた。【結論】電子顕微鏡で観察された細胞の化生性変化は、治療寛解過程の形態的变化の一つと推測されるが、MPA 療法による経時的な細胞病理像の解明には、間質の変化も含めて今後も更なる検討が必要と考えられた。

**P3-10-1 子宮体癌に対する腹腔鏡下悪性腫瘍手術の導入—Thiel 法固定による cadaver training を経験して—**

愛媛大

小泉雅江, 藤岡 徹, 安岡稔晃, 高木香津子, 田中寛希, 井上 彩, 橋本 尚, 松元 隆, 松原裕子, 松原圭一, 那波明宏

【目的】昨年 4 月より子宮体癌に対する腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術が保健収載され、多施設において導入が進められていると思われる。当科においても当該手術を導入し、またそれに先立ち Thiel 法で固定された cadaver を用いたトレーニングを導入したので、経緯および成績について報告する。【方法】当院の倫理委員会承認の下、従来のホルマリン固定に比べ組織の柔軟性が保たれる Thiel 法で固定された cadaver を用いて、骨盤リンパ節郭清を含めた腹腔鏡下悪性腫瘍手術の training を行った。その後、平成 26 年 4 月から 8 月までに当該手術を施行し、骨盤リンパ節郭清を行った 3 例について検討を加えた。【成績】従来のホルマリン固定に比較して Thiel 法で固定された cadaver の組織は柔軟性が保たれ、また気腹状態でも実際と同様の術野が得られ、高い再現性を示していると思われた。また骨盤リンパ節郭清を含めた当該手術を行った 3 症例は、年齢 50~60 歳、BMI23~33 いずれも類内膜腺癌、Grade1、進行期は pT1a 期であった。手術時間は 5 時間 10 分~6 時間 20 分、出血量は少量~250mL、摘出リンパ節は 18~24 個であった。また術後 1 日目の CRP は 1.97~5.89mg/dL で、3 例とも術後合併症は無く術後 5~6 日目に退院可能となった。【結論】子宮体癌に対する腹腔鏡下手術は低侵襲で出血量は少なく、また入院期間も短縮でき、開腹術に代わる術式と思われた。Thiel 法固定の cadaver を用いた腹腔鏡下トレーニングは、術野や感触において高い再現性があり、術者の育成において有用な研修方法であると思われた。